



親から子、子から孫へ 100年後も、ずっと、 遠野まつり。

エピソード2 3世代で参加

附馬牛町の佐々木義夫さん(左から2番目)は、家族3世代で遠野まつりに参加した。孫の和菜恵ちゃん(前列)は、馬場巡りは初めての経験。市外の専門学校に通う孫の雄大君(右端)は、馬場巡りにあわせて遠野に帰ってきた。息子の教雄さんと恵理子さん夫妻はそれぞれ、ししと笛吹きとして上柳しし踊りの担い手だ。義夫さんの願いは、来年も、再来年も、ずっと、3世代で遠野まつりに参加すること。郷土芸能は、家族の絆も深めてくれるのだ。

野人の心に再び火が付いた。遠野まつりに向けて、継承活動に力を入れる郷土芸能団体の姿がそこにはあった。少子高齢化や人口減少など、遠野を取り巻く環境は年々厳しさを増している。郷土芸能は、地域コミュニティ再生のカギを握る。遠野まつりをきっかけに、地域での継承活動が活性化し、活力あるまちづくりにつながれば、それらの課題を乗り越えられるかもしれない。100年後も、遠野まつりが続いている。私たちが、この遠野の子孫が、この遠野の地で、神楽やしし踊り、南部ばやしなどを、今と変わらぬ姿で舞っている光景を想像してもらいたい。今、私たちにできること。それは、地域の宝を未来につなぐことだ。

エピソード1 祭りはすでに 始まっていた。

遠野まつりが近づくと、郷土芸能団体の練習も盛んになる。地域のあちこちから太鼓や笛の音、子どもたちの笑い声が響き渡り、遠野の人は秋の到来を知る。仕事や学校が終わり、日も暮れると、地域の広場や公民館に子どもからお年寄りまで集まり始める。子どもたちはあたりを駆け回り、大人たちは世間話に花を咲かせる。だいたい人がそろると「さあ、やるべ」と練習が始まった。幼い子は、年上の子や大人たちの姿を見ながまねして踊る。上手くできないと、地域の大先輩がそっと近づいて、手取り足取り教えてあげる。子どもも大人も額に汗しながら舞い踊り、その場が一体となっていく。本当に神々が舞降りているかのよう…。一通り演目を終えると、さわやかな笑顔であふれた。こうして、遠野の人たちは、親から子、子から孫へ、脈々と地域の伝統を受け継いできたのだろう。昔と変わらない、日本のふるさとの原風景が、そこにはあった。郷土芸能の継承活動を通じて地域が一つになる瞬間。遠野まつりは、すでに始まっていた。



1_板沢しし踊り保存会は、古民家を活用した「ししの館」で練習。一つの明かりを頼りに舞を繰り広げていた 2_青笹しし踊り保存会。地域の体育館に大人から子どもまで集結し、群舞の練習を行っていた 3_穀町南部ばやし保存会。おはやしが響く中、練習に力が入る 4_飯豊神楽保存会。神楽の大先輩が手取り足取り舞を教え込む

宝を未来へ

遠野まつりを前に、郷土芸能団体が継承活動を行う光景は、遠野の秋の風物詩となっている。今年も、地域の宝が次代に受け継がれ、新たな伝統が紡がれていた。

郷土芸能を、今こそ

350年前、南部直栄公が郷土芸能を奨励して以来、遠野人には伝統文化を大切に継承するDNAが刻まれてきた。市民の熱い思いによって6年ぶりの合同開催となった今年、遠

郷土芸能の担い手たちにインタビュー

飯豊神楽

澤里 玲妃・珠杏 姉妹
(遠野東中1、土淵小3)

姉妹二人で一緒に練習に参加しています。神楽は難しいけれど、その分人を楽しませることができる郷土芸能だと思ふ。たくさんの演目を覚えて、見る人を笑顔にしたいです。



下郷さんさ踊り

土田 佳歩 さん
(遠野西中2)

小学校からさんさを始め、今年で7年目。緊張したけれど、今日は今までで一番うまく踊れました。また、たくさんの人から拍手をもらいうれしいです。ずっと、さんさを続けていきます。



長野しし踊り

大久保 祐汰 さん
(6歳、小友町)

太鼓は5歳の時から始めました。祭りで一日中太鼓を叩くのは初めてで、最後はつらくて泣いてしまいました。でも、しし踊りは大好き。来年も頑張って参加したいです。

仲町南部ばやし

菊池 香好 さん
(遠野北小6)

きれいな衣装を着て、美しい踊りを披露できる南部ばやしが好き。遠野まつりでは、仲間と一緒に頑張って練習してきた成果を、たくさんの人に見てもらえてうれしかったです。



青笹しし踊り

佐々木 迅 君
(遠野東中3)

保育園から保存会に参加し、ししは今年から。勇壮な舞にするために、どんなに疲れても意地で踊り続けようとしてきました。これからもずっと継承活動に参加していきたいです。



暮坪虎舞

菊池 隼 君(左)
(遠野北小3)
佐々木 魁利 君
(上郷小5)

たくさんの人前で踊ることに緊張。2カ月練習したかいがあり、虎になりきって演じることができました。もっと練習して、上手になりたい。

